法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-13

【書評】澤田直『サルトルのプリズム ： 二十世紀フランス文学・思想論』（二〇一九年、法政大学出版局） ： 幾条もの新たな問いかけの光

SAKAI, Takeshi / 酒井, 健

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学
(巻 / Volume)
17
(開始ページ / Start Page)
67
(終了ページ / End Page)
70
(発行年 / Year)
2021-03-30

【書評】
澤田 直『サルトルのプリズム　二十世紀フランス文学・思想論』（二〇一九年、法政大学出版局）

幾条もの新たな問いかけの光

酒井　健

国内外の研究の第一線で活躍するサルトルの専門家が上梓した論文集成である。「はじめに」によれば本書は「全体を通して文学と哲学が分有するいくつかの稜線を浮かび上がらせることを目指している。生きること、死ぬこと、書くこと、読むこと、語ること、考えること、共にあること、などである。それらのいわば実存的な問いに、二十世紀のフランス文学と哲学がそれぞれ、そしてまた共にどのように取り組んできたのか、その一端なりともでも素描できればと考える」（ix頁）。

本書は二部構成だが、一貫してサルトルが主軸をなす。第Ⅰ部「同時代を生きる」では各章ごとにサルトルと時代をともにした書き手が取り上げられ、サルトルとの対比的考察が進められる。第Ⅱ部「サルトルの提起する問い」では重要なテーマに沿って章が立てられ、新たな情報提供のもとに新鮮な展望が開かれる。

全編通して著者の論調は公平で、抑制がきいている。サルトルに一方的に肩入れせず、居並ぶ彼の論敵を悪玉扱いすることもない。さりとて、あれもよしこれもよしの、毒にも薬にもならない相対主義とは異なり、サルトルを含め、灰汁の強いそれぞれの個性の詳細にまで指摘が及ぶ。人一倍狭量で何事にも決めつけにかかる「知識人」なる種族の生態である。一面的な評価貼りから陰湿な刺激まで、私怨が胚胎していく様だ。だがそこから著者は哲学にとって、いや人間にとって本質的なパースペクティブへ読者を導き、そこに新たな光を差し込ませる。章から章へ読者は見知らぬ思想の風景に接し、いつしか「テクストの快楽」を

覚え、生き生きした息吹に感性をそよがせる。これはほかでもない人間の実存に寄せる著者の偏りなき情愛のためだろう。

具体的に本書を紹介すると、「はじめに」ではフランスにおける哲学と文学の交流の伝統が論じられ、双方の分野を積極的に生きたサルトルの背景が示される。第一章では「世代」に固執する彼の見方がその裏面に「時代遅れ」の思想形成を抱えていた事情が開示され、第二章ではサルトルのプルースト批判の彼方に「普遍化可能な独自性の追求」の展望が開かれ、そこでこの二人の交差が示唆される。第三章では両次大戦間のフランスの国際的な環境のなかでロシアからドイツの哲学界経由で入ってきたアレクサンドル・コイレのハイデガー哲学紹介、この実存主義の夜明けのなかで留学生の九鬼周造と新たな思潮を語り合った若きサルトルが紹介され、第四章では『文学とは何か』における強烈なブルトン及びシュルレアリスムへの批判が新たに他者問題として黒人文化への視点で捉えなおされていく。第五章では『内的体験』への酷評「新たな神秘家」に端を発するバタイユとの応酬が扱われ、著者によれば、両者は「真っ向から対峙し、決して交わることはな」く、これは、「バタイユが、文学を絶対視し（「文学は本質的なものであるか、さもなければ、何ものでもない」）、文学と悪を同一視し（「文学の表現するものとは、まさしく悪―悪の極限の形態」）、文学が「超モラル hypermorale」を要求すると主張するのに対し、当時のサルトルは、単なる悪の称揚の立場を捨て、積極的なモラルの構築を目指し、いわばその先を探究するからである」（一〇八頁）。ただし戦後のバタイユが『文学と悪』をはじめ様々なところで「対立物の一致」を統合とは違う交わりの境地として説いていた点、そして著者の澤田氏自身が本書の末尾の章で考察しているようにサルトルにも実体的統合とは別の多元性への志向が萌芽していた点、さらなる光をこの対立の展望に降りそそぐことができそうだ。第六章ではバタイユと同じく激しい対立に至ったレヴィ＝ストロースとの関係が哲学とは何かという根源の次元にまで降りて考察され、第七章では一見して疎遠なロラン・バルトとの近さが母親との共生、リズミカルな読書経験の視点から提起される。第八章では「六八年五月」へのサルトル、ドゥルーズ＝ガタリ、ブランショの対応がそれぞれの共同体論から検討され（サルトルは「溶解集団」、ガタリは「主体集団」、ブランショは「共通項を持たない共同体」）、最後の第九章では『物の味方（Parti-pris des choses）』の詩人フランシス・ポンジュをめぐって言語論からデリダとの対比が試みられる。著者曰く、「サルトルの評論のスタイルは、良くも悪くも、ひとつの観点か

ら対象とする作品や作家を明確に切り取り、ある角度からそれにアタックするということによって、対象をくっきりと浮き上がらせる。それとは別の角度からのアプローチがあるということを忘れさせてしまうほど、サルトルはそれを巧妙にやってのける」。時局のご意見番として戦後フランス社会で君臨したサルトルの原動力がここにあるのだろう。『知への意志』のフーコーとともに穿った見方をすれば、その光景は、知の人が繰り出す強力な言説を好んで享受しその人を表向き権力の座へ祭り上げ躍らせる大衆と哲学者との「戯れ」となろうか。対するデリダは「周到にこのような parti-pris（味方、加担）を避ける。むしろ、作品や作者自身の立場に立つという parti-pris を行うことで多元性をどこまでも保つのだ」（一九九頁）。しかし今やそのようなデリダの見方さえ権力を得ている。

第Ⅱ部は五つの章からなり、イメージ論、サルトルのテクスト・コーパスの生成研究、同性愛、文体論、自伝の問題が俎上に載せられ、知られざるサルトルの表情が次々に紙面に浮上する。と同時に、あの声高の左翼の旗手、アンガージュマンと状況の哲学者という誰しも知るサルトル像は相対化されていく。こうしたなかでとりわけ出色なのは、第Ⅰ部第六章のレヴィ＝ストロースとの対比、第Ⅱ部の掉尾を飾る自伝の章だ。

著者が引くレヴィ＝ストロースの発言は意味深長で、「実存主義として開花しようとしていた思想動向について言えば、それが主観性の幻影に対してあからさまに好意的であったために、正当な考察とは正反対のものであるように私には思われた。単なる個人的悩みを哲学問題にまで昇格させることは、それを一種のミーハー向け形而上学にしてしまう危険があまりに強すぎる」（『悲しき熱帯』第六章）。ここに『野生の思考』で披瀝されるサルトルの『弁証法的理性批判』への批判が起因するのだが、著者によれば「要するに、歴史的認識のうちに弁証法の認識を認めるサルトルは、制度、構造、行為の体系の認識を軽視しているが、そのような態度の根底に潜むのは文化を西欧の歴史と同一視する西欧中心主義であるというものであった。言い換えると、実存主義が標榜する単独者の思考は偏狭な西洋のヒューマニズムにすぎないとされるのである。実際、実存主義が個々の実存とその意識に根ざした思想であるのに対し、構造主義は人間が無意識のうちに構造によって動かされていると考えるわけで、その発想はまさに対極にあるのだ」（一一一～一一二頁）。状況を弁証法的に変革するその行先がたかだか西洋型ヒューマニズムにすぎないとのサルトル批判が妥当だとすれば、また逆に社会の構造をアプリオリに優越させる静態的認識は現状是認に陥りやすく、事

実「六八年五月」では「構造は街頭に降りていかない」との批判が教室に板書されたのである。

著者はしかし本書の最終章で、弁証法的統合に収まらない分裂志向を初期のサルトルに探りあて、より顕著に自伝的著作『言葉』から最後のサルトルまで底流すると指摘する。「多元的な世界を生きる複数の私」（三六五頁）こそ、今後さらに再認識されるべきサルトルの姿なのだ、と。もちろんこれは多元性や複数主義を金科玉条のごとく振りかざす「知識人」の形而上学を批判しながらのことであり、デリダやバタイユらのフランス現代思想の根源の動機を体感しつつのことだと思うのだが。